

小池辰雄記念図書室だより

2016. 6. 10(金) NO.31

千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

「小池辰雄を読む会」に参加して 水谷正美

5月の読書会に初めて参加させていただきました水谷と申します。記念図書室の石丸さんから「読む会に参加しての感想を書いていただけないか」とのご依頼があり、文字通り「右も左も分からない者」ではありますが、自己紹介を兼ねてお引き受けすることにしました。

私は茨城県にあるミッションスクールの高校で聖書の教師をしております。昨年、神様のご計画により小池辰雄先生の孫、瑠美子さんと出会い、結婚へと導かれました。結婚に先立ち、瑠美子さんのお母さん(民子さん)から「小池辰雄著作集」(全10巻)をいただき、そのとき小池辰雄という方の存在を初めて知りました。

この「読む会」についても瑠美子さんからたびたび話を伺っていましたが、勤務する高校が土曜日まで授業がありクラス担任もしているため休みが取れず、ようやく参加できた次第です。

当日は朝7時半に茨城県の家を出発。5月のすみきった空気、まばゆい新緑の中を車で走り、会場に向かいましたが、「一週間の仕事を終えた解放感」とも相まって、都賀で過ごせた時間は「心を吹き抜ける風」と表せる「さわやかで心癒されるひととき」となりました。

会場のビルに到着すると、1階から5階すべてが活動に関わるフロアであることにまず驚きました。そして水谷幹夫先生ご夫妻にご挨拶させていただきましたが、先生のことは30年ほど前、『百万人の福音』というキリスト教雑誌の記事で存じ上げていました。若い方々に力強く関わる活動が印象深く、名字が同じこともあり記憶に残っていました。

実際お会いした水谷先生はやはりパワフルで、くりくりとした瞳の中にも「目力(めぢから)」を感じ、集会で「神様がご用意くださった仕事に向き合うならワクワクする。私もストレスを感じたことがない」と語られた言葉は心に迫りました。マイクで感想を語られた方々からも、それぞれの人生の歩みにおいて真剣に道を求めてこられた「息づかい」が伝わってきました。ランチコンサートで心潤おされたあと、小池辰雄先生の展示資

料を拝見させていただきましたが、大学の仕事と伝道の両立は「並大抵の情熱」では不可能、そのような「自分を使い尽くす生き方」「愛情深さ」の源には「キリストとの出会い」はもちろん、お母様のこともあったのではと思います。

聖書に「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない」(ヨハネ3:8)とあります。小池辰雄先生のお働き、継承されたお弟子さん方のお働きはまさに「従来の枠組み」を超えて吹きめぐる「神の風」であったと、この日、さまざまな出会いを通して強く、そしてさわやかに私の胸に印象として残りました。

小池辰雄を読む会

●余 市「無者キリスト」「無の神学」(7月～)

2016年6月5日(日) 13:30~15:00

2016年7月3日(日) 13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札 幌 「無者キリスト」

2016年6月4日(土) 13:30~15:00

2016年7月3日(土) 13:30~15:00

札幌市南区川沿 10条 3-10-5 札幌祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(浅井)

●都 賀 「聖書の人ルター」

2016年6月25日(土) 10:00~12:00

2016年7月16日(土) 10:00~12:00

千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

*予習不要・初心者歓迎

●関 西 「無者キリスト」

2016年6月19日(日) 13:30~15:30

神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸バイブルハウス

*会費:500円(自由献金あり)

*連絡先:090-4645-7389(後地)

本図書室は献金で運営されています

図書室便りは隔月発行です

わが名は天鐘

1955（昭和 31）年の大晦日の夜、除夜の鐘を聞きながら瞑想する。除夜の鐘は百八つの煩悩を消す徴として、百八つ、打ち鳴らすのだと、子どものころから聞かされていた。

百八の 煩悩を撞く 梵鐘を
冥想すれば 鐘身一如（辰雄）

東洋の鐘の腹の中には、何もない。西洋の鐘にはガラガラと鳴るベルがあるが、東洋のそれは、がらんど。空無である。

鐘の空洞は、無限の天空を宿している、という気づきは、辰雄を果てしなく浮遊させる。鐘は天空に抱擁され、天空は鐘の中に宿っているのだ…と、ロマンチックに。

鐘が撞木で撞かれたとき、鳴るものは何か？ 鐘の中の天空が鳴るのである。それはまた、天空を宿した鐘の音とも言える。鐘と天とは、ここに一体となっている。一如となっている。何たる秘義であろうか。

天空を 腹に宿せる 鐘のごと
み霊の君を 宿しまつらん（辰雄）

私という鐘。それはキリストに、愛の霊綱をもって吊るされている。無私、無立場、無主観とされつつ、聖霊に抱かれ、聖霊を宿し、神の聖旨（みむね）に打たれて、天音を発する存在にならせていただきたい！ と、歌ったのである。そして告白する。

私はいま、十字架のキリストの贖罪によって、「私」という旧きアダムから解放され、無「私」とされました。これこそが恩寵の現実であり、信仰の現実です。

このなまの、現実の私自身は、相変わらずの罪びとに過ぎないのですけれども、にもかかわらず、キリストは十字架の事実をもって、実力をもって、私を無私、無罪としてくださっています。その実力とは、キリストのみ霊であります。み霊の実力こそが、旧き私を排除し、限りなく新生・展開させてくださるのです、と。

正にこの贖われたる罪びとが、ご恩寵によってキリストと一つにされる事態を受けとることを

「信」という。神の「言」たるキリストが、罪「人」たる私に一体となってくださる事態を、「信」（人偏に、言である）という字があらわしているではないか。そして、神の「言」たるキリストが、私に「成る」ことをこそ、「誠」というのだ。

この私という鐘自体は、「土の器」に過ぎない。けれども、キリストのみ霊を呼吸しているうちに、すなわち、天空を空洞に宿しているうちに、次第に、金銀も及ばぬ天鐘にされていくのだ。そうして天空（み霊）のキリストが、鐘すなわち私に、一体一如となってくださるのだ。このような恩恵にあるがゆえに、私は自分の名前を「天鐘」と言わせていただく。また、すべてのキリスト者は、この意味において「天鐘」ではないだろうか。少なくとも使徒たちの信仰の現実は、このような質のものであったと信ずる。

私たちは、このキリストに宿っていただくことを無限に求めていくのみである。そしてキリストの栄光を身証していくのみである…と。

だから、「われは世の終わりまで、常に汝らの中に在るなり（マタイ 28：20）」との、主のみ言葉を、辰雄は、「汝らとともに」ではなく、「汝らの中に」でなければいけないことを、しばしば強調したのであった（『エン・クリスト』という雑誌を創刊するのは 1980 年まで、待たなければならぬが）。

手紙を書く時にも、辰雄とは書かず、差出人は「天鐘」となっていた。



昭和 29 年、自宅庭にて、小池辰雄